

土屋倭子『トマス・ハーディの文学と二人の妻』  
（音羽書房鶴見書店，2017 年 10 月，iv+403 頁）  
ISBN: 978-4-7553-0403-3

宮崎 隆義  
Takayoshi MIYAZAKI

女性研究者が、男であるハーディが描いた男性や女性を論じ、それを男性である私（たち）がさらに論じることは、まるで合わせ鏡のようにハーディと向き合わされるような感がある。特に「ジェンダー」に軸を置いて考えると、作家が男性であろうと女性であろうと、「男性」なるものが男性の登場人物として、「女性」なるものが女性の登場人物として発現するものであろう。「ジェンダー」が混沌としている現代（いや過去においてもそうだったろうが）、外形的なものと内質的なものとの関係は必ずしも一致していないが、外形的なものが社会の中で機能を持たされる時に、大きな疑問が生じるとともに普遍性を帯びた問題として提起される。ハーディの作品の凄さは、19 世紀イギリスという枠組みの中に囚われていながらも、呻吟するかのように社会とそれが含むあらゆる慣習や制度に対して、可能な限りの疑問を突きつけていることであろう。ある時代や国という中で生きざるを得ない私たち同様に、ハーディもその時代とイギリスという国の中で生きたのである。

ハーディは、「帝国」「階級」「ジェンダー」「宗教」といった、時代思想の根幹を為す問題と真摯に対峙し、模索し、終生なんらかの答を求めて苦闘した。土屋倭子氏は、ハーディの生涯を二人の妻との関わりで辿りながら、時代の歴史的コンテクストとハーディの文学と三人の関係性のなかに、ハーディ文学の「真実」に迫ろうとしている。

## 第 1 章 作家ハーディの誕生

詩人としての夢を抱きながらもハーディは建築家としての修行を積み、コーンウォールのセント・ジュリオット教会に修復の仕事で赴く。ハーディを迎えたのはエマ・ギフォードで、後一八七四年に結婚することになる。その出会いの様子は、詩「ライオネスに出かけた日」にその時の思いが描かれており、また、その出会いとその後のことが『青い目』に描き込まれている。エマとの出会いは、建築の仕事と小説家との選択に思い悩んでいたハーディを小説家へと向かわせる契機となる。エマは、ハーディの助手兼秘書として彼の作家としての出発を後押しするが、エマとのひそやかな結婚式は、双方の係累の階級意識が影を落としたものとなった。エマとの新婚生活は、『窮余の策』『エセルバータの手』『はるか群衆を離れて』と、小説家へと着実に進んでゆくハーディの基盤となるものの、エマの体調を顧みないハーディとの間に溝を深めてゆくこととなる。

## 第 2 章 農村と都会

結婚したハーディとエマにとって、落ち着いて住める家を探すことが問題となる。新進の作家として歩み始めたハーディにとって、ロンドンと故郷とどち

らを拠点とするかは、内面的な問題でもあった。『帰郷』はそのハーディの意識を色濃く秘めたものであるが、ハーディの「帰郷」の問題は、エマとハーディの母親ジマイマとの関係を含むこととなる。『帰郷』を書き終えたハーディは、スターミンストン・ニュートンからロンドンに居を移す。エマにとってロンドンの社交界は、望んでいたものであると同時に、ハーディを小説家として成功に導く上でも一心同体の気持ちであったが故に重要なものであったが、ロンドンでの暮らしには不安もつきまとっていた。折しもケンブリッジへの旅行から戻ったハーディは体調を崩し絶対安静を言いつけられる。そうした状況で口述筆記を必死に支えたエマは、夫ハーディへの思いを鬱屈させる事となるが、回復したハーディの健康と創作上のインスピレーションのために、ドーチェスターへの帰郷、マックス・ゲイトに家を建てることに帰結する。ロンドンと故郷での暮らしが、都会と田舎という問題を深めることになるが、その行き来との間で生まれたのが、『カースタブリッジの町長』であった。そこには帰郷したハーディが直面せざるを得なかった農村の実態があった。階級制度のもとでの農民の状況、さらには新旧の世界の対立がハーディの胸を痛めることとなる。その農民階級への思い、それはまた『ダーバヴィル家のテス』にも描かれていくことになるが、自身へも跳ね返ることになり、帰郷によってハーディの母との距離が縮まったエマにも大きな緊張感をもたらすことになる。

### 第3章 田舎屋（コテジ）から邸宅へ

ドーチェスターのマックス・ゲイトに家を構えたハーディは、書斎で一日の大半を過ごしながら大作や短編を生み出してゆくが、ハーディー家とエマとの間にはそれまでくすぶっていたものが噴き出す可能性があった。エマには「田舎屋（コテジ）」に住むハーディー家に対する優越感、他方ハーディの母や弟妹たちにはエマに対して「貧しい紳士階級」という嘲りの気持ちがあったようである。そうした双方の思いが、ハーディとエマとの間に確執を生むことにもなった。その頃ハーディはダーウィンの思想に影響を受け、『森に住む人々』に、あるいはそれ以降の作品に色濃く表されることとなる。人間を取り巻く「大きな網の目」「クモの巣」のリアリティをハーディは凝視する。そうしたハーディの妻として、出会いの時から彼の片腕として支えてきたというエマの思いは、ハーディとの感情の交流がうかがえない、事細かく記された日記を通して推し量ることができるかもしれない。ハーディは、現実の農村の厳しさを見つめ、それを含む人間の社会における人間の姿、社会、自然、世界のあり様を、既存の制度や宗教、道徳と衝突してもなんとしてでも表そうとの思いを強め、いずれ『ダーバヴィル家のテス』や『日陰者ジュード』に繋がる。

### 第4章 ヴィクトリア朝の「女」の言説を覆す

『ダーバヴィル家のテス』がいかなる小説であるかを考える時、そのタイトルとともに添えられた副題も考えなくてはならない。テス・ダービフィールドをダーバヴィル家のテスと呼ぶ時、その関係性において、時間の流れ、社会の変遷の歴史を明示することとなる。テスは、歴史的、社会的なコンテクストの中に置かれ、テスと関わるアレック・ダーバヴィルもエンジェル・クレアも同様に置かれ、それぞれが持つ矛盾が浮かび上がることとなる。自然との関わりで、テスの「清純さ」も「性」もコンテクストとして関係づけられつつ、ハー

ディは、人間として生きているありのままのテスの姿を描こうとする。だが、ありのままに描こうとすれば、グランディズムと対立せざるを得ない。小説を書くことを通して積もっていた、ハーディのグランディズムへの憤懣と怒りは、『ダーバヴィル家のテス』の後『日陰者ジュード』において頂点に達する。グランディズムとの戦いは、エマとの亀裂を深めることにも繋がった。秘書の役割を演じハーディの原稿の清書をしていたエマは、ハーディが付き合い始めた有名人や上流階級の人々に関心を抱くことはあれ、ハーディの苦悩には理解が及ばなかったようである。ハーディとエマ双方に身近な人々の死を経験し、それぞれの係累との関係に不協和を感じながら、小説で成功を収め経済的にも安定しつつも、上流階級に入り込めないハーディ夫妻の現実が、夫婦の間の亀裂をさらに深めたようである。

## 第5章 ヴィクトリア朝の価値観を斬る

『日陰者ジュード』執筆の頃、ハーディはヘニカー夫人と知り合う。気品ある、上流階級の物腰を身につけ、文学に対して並々ならぬ素養と感受性に関心を秘めた夫人はハーディを魅了したようである。ヘニカー夫人との付き合い、手紙のやり取りから、ヘニカー夫人が『日陰者ジュード』のスーヤ、短編「夢見る女」のエラ・マーチミルの造形に大きく関わっていることがうかがえる。また、ヘニカー夫人との合作による作品を通して、ハーディは、夫人による削除から少なからぬ失望や幻滅も味わう。そうしたヘニカー夫人と夫ハーディとの関係を、妻エマは心穏やかならざる思いで見ていることがうかがえるし、ハーディもまたエマがヘニカー夫人にどういう対応をするものか心配していたといわれる。夫に対する批判を含んだ手紙によって、エマの苛立ちが想像できるが、ハーディのヘニカー夫人への熱情は次第に冷めていったようである。『日陰者ジュード』は、当時の宗教、教育、階級、結婚の諸制度を問い直す、読書界に衝撃を与えるものとなった。例のグランディズムにうんざりしながらも、ハーディは連載には改変を加え、それを元に戻して出版するという作業をし、ジュードを通して肉と霊の間で戦われるすさまじい戦いがあるがままに描き出そうとしている。その描き方には、写真的なリアリズムに反対したハーディの、偽の姿を借りて創り出す方法が示されている。作品には「ファザー・タイム」を登場させているが、その存在がまさに現実には考えられない偽の姿を借りたものである。小さな「時の翁」と擬人化されるその存在は、ハーディの言う「宇宙内在の意思」を担うとともに、「時間」の感覚、もしくは「記憶」に取り憑かれたハーディを如実に示している。

## 第6章 小説家から詩人へ

ハーディは『日陰者ジュード』に対する激しい非難に辟易して、小説を断念し詩作に転じたと言われるが、ハーディ自身は青年期から詩人になることをめざして、小説執筆は生計のためであったとも言われている。ハーディは、慎重な準備をして、経済的なリスクを引き受けて第一詩集を出版したが、その詩集は、小説では叶わなかった「言いたいこと内容をもっともふさわしい詩形で表わすこと」に徹して、内容、用語、語彙、イメージ、韻律、詩形など、当時のヴィクトリア朝が詩に求めていた常識を覆すものであった。あのトライフィーナにまつわる個人的な思いを表した詩など、個人的なものから、「不可

知論者」ハーディを示すものなど、多様で多彩な詩は、先に述べた「時間」に関わり、「記憶」や空間を自在に操り、時間的空間的な広がりを見せている。詩集に対しての評価は芳しくはなかったが、ハーディは自分の信念と立場を保ち主張して、次々に詩集を発表し、一作ごとに詩人としての地歩を固めていった。その道程は平坦なものではなかったが、ハーディの書く詩に対してエマは心穏やかではなかった。不可知論者として、国教会や神への不信を表明して憚らないハーディに対し、熱心で典型的な英国国教会の信者であったエマは、『日陰者ジュード』でも示された国教会や結婚制度に対する批判に強い衝撃を受けていた。そればかりか、ハーディを世に出した自分の献身的な支えが誰からも正当に評価されていないことや、犠牲にされた自分の文学的な才能に対する思いなどで、エマはハーディとの亀裂をさらに深めたばかりか、「自分だけの部屋」に閉じこもることとなった。エマは女性参政権運動に関わるようになるが、その運動に対してやがては反発を感じたばかりか、バランスの欠いた言動によりその不安定な状態がうかがえた。

#### 第7章 フローレンス・エメリー・ダグデイルの登場

ハーディは、ヘニカー夫人に伴われてマックス・ゲイトを訪れたフローレンスと出会う。三九才近くも離れた若いフローレンスに対して、ハーディは心惹かれてゆく。妻エマとの関係が修復不可能なところまで追い込まれていたハーディにとって、若く知的で文学への関心を共有でき、不可知論的な世界観にも反感を示さなかったフローレンスは、次第に大きな存在感を持つに至る。妻エマとフローレンスとの関係に、三人三様の皮肉な状況が生まれてしまうが、エマが一九一二年突然死ぬことによって事態は急転回する。妻エマの死は、書き残された悪魔的な日記にもかかわらず、ハーディに昔の忘れかけていた甘美な日々の記憶を呼び起こした。エマへの挽歌と言われる一連の詩が書かれるが、その詩は、内容、イメジャリ、韻律など、ハーディの詩人としての卓越した技巧が駆使されている。

#### 第8章 トマス・ハーディ晩年の成果とフローレンス・ハーディの栄光と苦悩

エマの死後、七十歳を迎えたハーディにとって、フローレンスとの結婚と第一次世界大戦の勃発という大きな出来事が起こる。ハーディは、ナポレオン戦争、ボーア戦争、第一次世界大戦の三つの戦争を作品に扱っているが、ハーディが生きた時代、大英帝国の時代はまさに「帝国」と「戦争」が時代を織りなすテキストであった。『覇王たち』『ラッパ隊長』そして第五詩集『映像の見えるとき』にハーディは戦争の不条理と、戦争に向かわせる「帝国」の論理に心を痛めている。ハーディは年を経て、当時の絶望的な状況、時代の思潮を嘆きつつも改善へと向かうかもしれないかすかな希望を見出しているかのような境地に至っている。エマの死後、絶望感にとらわれるハーディにとってフローレンスは「守護天使」のように思われたのであろう。二人はひそかに結婚式を挙げた。大きな年齢差もあり、二人とも周囲の目を非常に気にしていたようである。年若いフローレンスにとって、先妻エマへの思いを詩に込めるハーディには複雑な思いもあったろうし、エマの係累にもかなりの抵抗を感じたようである。しかしながら一家の女主人として采配を振るうことになり、マックス・ゲイトを訪れる多くの客人たちを厚くもてなした。ハーディには規則正しい生

活を送るべく気を配り、秘書としてタイピストとしてハーディの文筆活動を支えた。人生の晩年を迎えたハーディは、自伝の示唆を受けて入念な注意を払いながら、自伝の執筆をする。フローレンスとの間で、後世に残したい自分を投影した『ハーディ伝』が、ハーディの死の直前まで続けられる。その『ハーディ伝』に対して、フローレンスは屈辱も感じながら精一杯の反撃ともいえる操作を加えている。

#### 終章 トマス・ハーディと二人の妻が遺したもの

ハーディは一九二八年一月十一日に心臓発作で息を引き取ったが、その死後フローレンスは押し寄せる様々な事態に直面することになる。ハーディの葬儀は三ヶ所で行われており、未亡人となったフローレンスは、国家的な葬儀からドーチェスターでの葬儀、先祖代々の墓地のある教会での葬儀と、奔走を強いられる事となるが、そのフローレンスをコッカレルやバリーが助けている。ハーディの記念碑、ハーディの像の設置など、知人友人の助けを受けながら粛々とこなしたフローレンスは、その晩年には土地への貢献としてさまざまな活動を行っている。マックス・ゲイトのハーディの遺品や先妻エマの遺品の扱いなど、処分や保存などこなしつつ、一九三七年に世を去っている。

本書は、二〇〇〇年に『「女」という制度—トマス・ハーディの小説と女たち』（南雲堂）を上梓した土屋氏が、ハーディと関わった二人の妻に目を向け、その三人の関係性から、ハーディの文学を「帝国」「階級」「ジェンダー」「宗教」をキーワードとして、歴史的、社会的、文化的なコンテキストで明らかにしようとしたものである。ハーディとその妻を考える時、男である私（たち）は、無意識のうちにハーディの立場に立ってしまうかもしれない。本書を読み進んでいくと、土屋氏が二人の妻の位置に身を寄せて、あたかも「妻」の立場でハーディその人を捉えているような感を文章の節々に感じる。ハーディの作家としての出発から、エマとの結婚生活、その中で続けられた創作活動、冷たい夫婦の関係の中でのヘニカー夫人との関係、エマの死とフローレンスとの再婚、最晩年の様子とそのハーディを看取ったフローレンスという視点は、おそらく私（たち）のような男性の研究者には思いつかないであろう。小説や詩の分析と、氏も述べている困難な手紙の読み解きは、ハーディの創作活動の裏側を知る上で大きな意味がある。最近の研究動向にも沿った膨大なコンテキスト探索と読みが、本書で遺憾なく示されており、若い研究者諸氏にとっては、大きな刺激となると思われる。